報道関係各位

BankART1929では、第8回横浜トリエンナーレと連携した以下の展覧会を開催します。

BankART Life7「UrbanNesting（アーバンネスティング）：再び都市に棲む」

BankART1929はこれまで横浜トリエンナーレ開催毎に、あわせて大規模な連携企画展「BankART Life」を開催し、３年に一度の総括とその後の指針を示してきました。BankART活動開始から20年のタイミングで開催する７回目の「BankART Life」のタイトルは「UrbanNesting：再び都市に棲む」です。

2004年、横浜市が推進する創造都市構想のリーディング事業として始まったBankART1929は、歴史的建造物や港湾倉庫などの遊休施設を文化芸術に活用することによって街ににぎわいをつくることをミッションに、館内外問わず様々な事業を展開してきました。またBankART自身も、都市の変容と呼応して何度もその棲家を移動せざるをえなくなり、引っ越しを繰り返し、様々な危機に直面しながらも活動継続して現在に至ります。「都市に棲む」というフレーズは、そんなBankARTのあり方としてたびたび使われてきましたが、この「棲む」という言葉には単に居住するという意味を超えた動物的な感覚が含まれています。野生の思考で都市を見つめ、自らの場所を発見し獲得していく喜び。それと並行して都市の中に潜むさまざまな問題や課題に対して真摯に対峙し、不確実さを引き受けながら、自由自在に形を変えてそれでも都市に棲み続けること。都市に棲む鳥たちや虫たちが、明るい日差しに戯れる日もあれば風雨の吹き荒れる中それぞれの巣で身を寄せ合いじっと耐える日もあるように、嵐の後の雨に洗い流された瑞々しい空気が、都市の見え方を大きく変えてみせてくれるように。

「都市」のような捉えどころのない大きなものについて考えるとき、個々人が捉えることのできる都市像は生物における環世界のように自分の立ち位置から独自の視点でみたものでしかなく、自分に見えるものは常に部分でしかありません。しかし、自分にしか見えない都市を地図にして誰かに渡したら、その人は同じ都市を違う都市のように巡ることができるかもしれません。様々な地図の無数の交換を繰り返す中で互いを更新し創造していった先には、どんな都市が立ち現れるでしょうか。

今回の会場となる「BankART Station」は、みなとみらい線「新高島駅」地下１階に広がる大空間であり、外部空間への結節点でもあります。この「BankART Station」を起点として、みなとみらい21地区、関内地区、ヨコハマポートサイド周辺地区の３つのエリアの日常空間に作品を展開します。さらに多様なガイドによる「ツアー」によって、さまざまな視点から都市を再び訪れ直してみたいと思います。

統一テーマ「野草」について：今、成熟しつつある都市は管理され規制されると同時に、本当の意味で未知のものに出会う自由さを失いつつあるようにもみえます。フェンスに阻まれ路傍に咲く花を摘むことさえままならない、そんな都市でもなお私たちは、ここを棲み家とするものとして、自由の花を摘みに、あるいは何かを予感するために、あえて都市に身を置いてみようと思います。そこには今回のトリエンナーレがテーマとしている「野草」に通じるものがあるのではないかと思っています。

参加作家（五十音順・屋外展示作家含む）
淺井裕介、アトリエ・ワン＋東京工業大学塚本研究室、石内 都、磯崎道佳、ウー・チェンイー、牛島達治、大田黒衣美、岡﨑乾二郎、甲斐貴大/studio arche、片岡純也＋岩竹理恵、川俣 正、キム・ガウン、蔵 真墨、小林 椋、佐藤邦彦、さとうくみ子、志田塗装＋酒井一吉、島袋道浩、下寺孝典（TAIYA）、白井美穂、SPACESPACE、鷹野隆大、高橋士郎、谷本真理、電子音響ピープル、野老朝雄、中谷ミチコ、西原 尚、蓮輪友子、婦木加奈子、blanClass＋神村 恵、みかんぐみ、水木 塁、三田村光土里、光岡幸一、村田 真、矢内原充志、柳 幸典、ヤング荘、吉田山+西山萌+木雨家具製作所、葭村太一、ワークステーション＋武蔵野美術大学建築学科高橋スタジオ、ほか （42組／2024年2月7日現在）

BankART Life7「UrbanNesting：再び都市に棲む」開催概要
会場：BankART Station+周辺各所（関内地区、みなとみらい21地区、ヨコハマポートサイド周辺地区）
会期：2024年3月15日（金）- 6月9日（日）
時間：11:00-19:00（BankART Station）
休場日：木曜日［4/4、5/2、6/6を除く］（BankART Station）
※BankART Station以外の会場の休日および観覧可能時間は、各設置場所に準じます

料金：●セット券（横浜トリエンナーレ+BankART Life7+黄金町バザール2024）一般3,300円（3,200円）/ 横浜市民3,100円（3,000円）/ 学生2,000円　（　）は前売料金　　※BankART Life7と黄金町バザール2024はパスポート制
●BankART Life7単体パスポート　1,000円
●高校生以下無料、障害者手帳をお持ちの方と介護の方1名は無料
※セット券、単体パスポートは、BankART StationおよびBankART KAIKOにて販売

主催：BankART1929
共催：横浜市にぎわいスポーツ文化局、
横浜トリエンナーレ組織委員会（馬車道駅コンコース作品のみ）、パシフィコ横浜（ぷかり桟橋会場のみ）、ヨコハマポートサイド街づくり協議会（ヨコハマポートサイド周辺地区のみ）
協力：横浜高速鉄道株式会社、株式会社ココラボ、株式会社青柳建設、Yokoito Additive Manufacturing、株式会社鈴木事務所（YSDO）、株式会社カシマ、カモ井加工紙株式会社、The Third Gallery Aya、Yumiko Chiba Associates、ANOMALY、KAYOKOYUKI、一般社団法人HAPSほか
その他、作品設置に関係いただいた施設・店舗関係者の皆様、ツアーにご協力いただいた皆様

問い合わせ：BankART1929　info@bankart1929.com　045-663-2812
展覧会特設サイト：https://www.bankart1929.com/life7/

BankART Life7「UrbanNesting：再び都市に棲む」主な見どころ

■ BankART Station

直径２m の土玉、柳 幸典「Ground Transposition」と川俣 正「Nest」が、みなとみらい線新高島駅の地下空間で皆様をお出迎え、展示室内では 2021 年に心身ともに大きな転回を経験した**岡﨑乾二郎**による大作絵画と対面する。これまで 20 年の BankART の歴史の中で大型個展を繰り広げた作家たちとともに、三田村光土里、矢内原充志、片岡純也＋岩竹理恵、blanClass+神村 恵、水木 塁、葭村太一、婦木加奈子、佐藤邦彦、さとうくみ子、電子音響ピープル、志田塗装＋酒井一吉、吉田山+西山萌+木雨家具製作所などの気鋭の作家たちが「UrbanNesting：再び都市に棲む」というテーマのもと、それぞれの視点から都市空間に挑んだ作品を展開する。

Courtesy of the artist and galerie frank elbaz
Photo: Yulia S.

■ 関内地区

石内 都「絹の夢―silk threaded memories」@ 馬車道駅コンコース
（共催：横浜トリエンナーレ組織委員会）
馬車道周辺はかつて横浜開港から近代の礎を築いた「生糸貿易」に携わる商館や検査所が置かれ、関東甲信越一円から集積された生糸が欧米へと輸出されていった。この絹に縁ある地に石内都「絹の夢」から紡がれた空間を立ち現わす。

その他、関内地区では、志田塗装＋酒井一吉による志田塗装（伊勢佐木町センタービル３F）での週末限定展示や、創造界隈拠点（黄金町エリアマネジメントセンター＋象の鼻テラス）および横浜トリエンナーレ組織委員会と協働して「創造都市横浜20周年記念　横浜クリエイティブCOOP」（@BankART KAIKO ショップエリア）などを展開する。

©Ishiuchi Miyako「絹の夢」
Courtesy of The Third Gallery Aya

■ みなとみらい地区

中谷ミチコ「すくう、すくう、すくう」@ ぷかりさん橋（共催：パシフィコ横浜）
2021 年に開催された「奥能登国際芸術祭」のため制作された作品を、横浜港に浮かぶ浮桟橋「ぷかりさん橋」にて再展示。石川県珠洲市飯田町の老若男女の両手（水を掬う仕草）をもとに制作された彫刻作品。展示と同時に購入者を募り、売上げは能登半島地震の被災地に返還される。

その他、みなとみらい線各駅やキング軸に隣接した建物などにも作品展示を予定。

Photo: Hayato Wakabayashi

■ ヨコハマポートサイド周辺地区

みなとみらいに隣接したヨコハマポートサイド地区は「アート&デザインの街」というキャッチフレーズのもと 1980 年代に開発された。横浜駅きた東口に接続する商業施設横浜ベイクォーターから、オフィス街、高層住宅街、そして市場に隣接する横浜中央市場通り商店会までポートサイド周辺の日常空間の中にそれぞれの場所にあわせた作品を挿入する。**淺井裕介**は横浜ベイクォーターの店舗でマスキングテープを用いた作品を、**光岡幸一**はテープを用いて風景に文字を書くシリーズを「つま正」本社ビルで展開。また横浜ディスプレイミュージアムでは白井美穂が、会場側から素材提供を受けて新作インスタレーション「Flower Child ― Cosmicomics（フラワーチャイルド ― コスミコミックス）」を展開する。※ 作品の観覧可能日時は店舗営業日に準じる
（共催：ヨコハマポートサイド街づくり協議会）

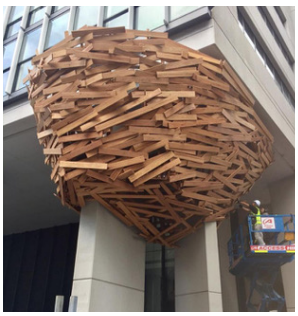
■ 多様な地図で巡るツアー

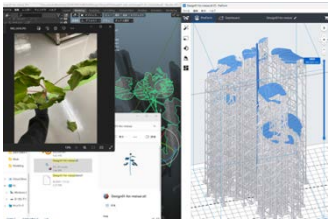
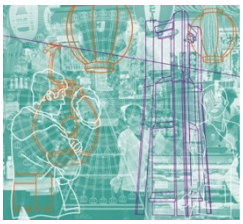
会期中、上記３エリアを中心に、都市を巡る様々なツアーを開催。
実施予定ツアー：村田真＋飯島悦郎によるパブリックアートツアー、**blanClass+神村恵**による「身ひとつで生きる」ライブアートツアー、電子音響ピープルによる「音」で巡る都市ツアー、山野真悟による伊勢佐木町古本屋ツアー、ACY と関内外クリエイターズによる関内外オープンツアー、海洋市民大学による海からみた都市横浜ツアー、BankART スタッフによる屋外展示作品を巡るツアー、ヨコハマポートサイドの展示作品と横浜中央卸売市場を巡るツアー、アート関係者向けみなとみらい企業ツアー　等

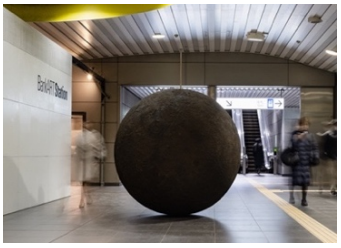
※最新のリリースは　https://www.bankart1929.com/life7/press　にて随時更新します。

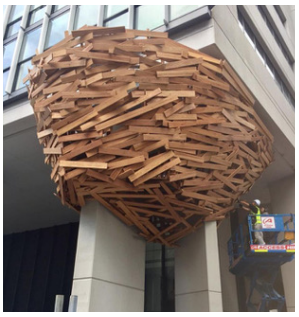
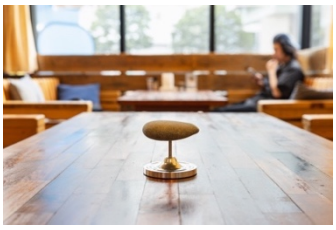
本展覧会に関するプレス関係のお問い合わせは下記にお願いします。
E-MAIL press@bankart1929.com　TEL 045-663-2812 （担当：細淵、高橋）

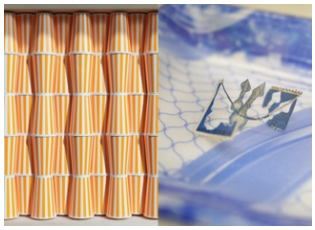
参加作家経歴と参考画像

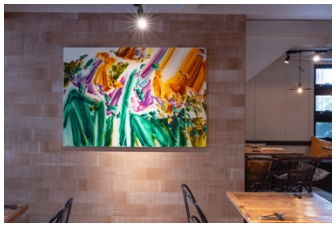
BankART Station	
浅井裕介（あさい・ゆうすけ） 1981年東京生まれ。土、小麦粉、テープ、道路用白線などを素材に、環境にしなやかに呼応するように国内外の様々な場所で奔放に絵を描くことで絵画表現の本質を探る作家。2019年横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。今回は「この場所でつくる」をキーワードにマスキングテープに耐水性マーカーで植物などを描く「マスキングプラント」シリーズを、横浜ベイクォーター内の3店舗を紡ぐように展開。	
岡崎乾二郎（おかざき・けんじろう） 造形作家。批評家。1955年東京生まれ。豊田市美術館（2019年–20年）で大規模な個展を開催。「ヴェネツィア・ビエンナーレ第8回建築展」（2002年、日本館ディレクター）などつねにジャンルを超えた先鋭的な芸術活動を展開するとともに、美術批評を中心として執筆を続ける。主著に『ルネサンス　経験の条件』、『抽象の力　近代芸術の解析』、『感覚のエデン』、『絵画の素』。作品集に『視覚のカイソウ』、『TOPICA PICTUS』など。BankARTでは2014年に大型個展「かたちの発語展」を開催。	 Courtesy of the artist and galerie frank elbaz Photo: Yulia S.
片岡純也＋岩竹理恵（かたおか・じゅんや＋いわたけ・りえ） 日常のささやかな出来事をシンプルな現象で再現するキネティック作品と、印刷物などから想像や類推でイメージを展開させていく平面作品を組み合わせた空間構成が特徴的で、素材や図案の出会いに物語を生み個々の作品の題材がゆるやかに響きあう手法を使う。瀬戸内国際芸術祭2022、MOTアニュアル2020（東京都現代美術館）、BankART Under35 2017など。	
川俣 正（かわまた・ただし） 1953年北海道生まれ、フランス在住。ヨーロッパはじめ国内でも、おもに野外展示のプロジェクト多数。横浜ではヨコハマトリエンナーレ2005総合ディレクターをつとめ、展示では大規模個展「Expand BankART」（BankART Studio NYK/2012）、BankART Life VI 「都市への挿入」（旧第一銀行横浜支店内外部＋みなとみらい線馬車道駅構内/2020）など。2013年芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。	
佐藤邦彦（さとう・くにひこ） フォトグラファー、プロダクトデザイナー。1986年東京生まれ。2010年芝浦工業大学大学院工学研究科建設工学専攻修了。デザイン事務所勤務を経て2017年よりフリーランスのデザイナーとして活動。デザイン業と並行して、歴史という不可視のものを表象する遺物やモニュメントを被写体とし、それらと社会、人々の関係性を考察する写真作品の制作を行っている。	
さとうくみ子（さとう・くみこ） 1990年岐阜県生まれ。2020年愛知県立芸術大学大学院美術研究科修士課程油画・版画領域修了。主な個展に「ハッピーセット」（アートラボあいち/愛知/2021）、「一周まわる」（YEBISU ART LABO/愛知/2019）。主なグループ展に「味 / 処」（神奈川県民ホールギャラリー/横浜/2023）、「UNLOGICAL 07」（MONO.LOGUES/東京/2023）、「第24回岡本太郎現代芸術賞展」（川崎市岡本太郎美術館/神奈川/2021）など。	
志田塗装＋酒井一吉（しだとそう＋さかい・かずよし） 横浜を拠点とする塗装業者。経年劣化した外壁を新たに塗り替えるだけではなく、長年の汚れや雨染み、傷などの風合いは美しいという考えのもと独自の描画技術によってこれらを再現する特殊塗装を行う一方で、建物の外壁塗膜を剥がし、収集する活動にも取り組む。酒井一吉が代理人を務める。「そして、初めに戻る」大久保あり＋志田塗装（アズマテイプロジェクト/2022）、「志田塗装 虚実の皮膜」酒井一吉（アズマテイプロジェクト/2022）など。	

鷹野隆大（たかの・りゅうだい） 1963年生まれ。2006年 セクシュアリティをテーマにした写真集「IN MY ROOM」で第31回木村伊兵衛写真賞。2011年には日本特有の街並みを集めた写真集「カスババ」を、2016年には影をテー マにした写真集「光の欠落が地面に届くとき 距離が奪われ距離が生まれる」を発表。性や都市、光と影など身近なものを題 材にしながら、制度化された視覚の外側を模索している。2021年、国立国際美術館（大阪）にて個展「毎日写真 1999-2021」を開催。2022年、第72回 芸術選奨 文部科学大臣賞受賞（美術部門）、第38回写真の町東川賞 国内作家賞受賞	 ©Takano Ryudai Courtesy of Yumiko Chiba Associates
電子音響ピープル（でんしおんきょうぴーぷる） 「電子音響ピープルプロジェクト」は作曲家･サウンドアーティストである柴山拓郎が立ち上げた、すこし実験的で、多くの人からしばしば「難解」と受け止められてしまう電子音響音楽を、より多様な人々と共に創る参加型プロジェクトアートです。このプロジェクトは、参加者のみなさんを、音楽の受け手としてではなく、少しヘンテコな音楽を自ら創るアーティストとして、共にその体験を楽しむことを目指しています。	
婦木加奈子（ふき・かなこ） 1996年兵庫県生まれ。金沢美術工芸大学美術科彫刻専攻を卒業後、2020年チェルシーカレッジオブアート修了。身につける・外へと持ち出すなどの行為や、生活の営みを読み替えた制作プロセスを用いて、日常の風景の中へ潜り込む彫刻作品を発表。主な展覧会に「いなさ」（浜松市鴨江アートセンター/2023）「第1回 MIMOCA EYE」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館/2022）「TOKAS-Emerging『ストレンジャー』」（トーキョーアーツアンドスペース本郷/2022）など。	
blanClass＋神村 恵（ぶらんくらす＋かみむら・めぐみ） blanClass（Live Art & Archive）は2009年～横浜の住宅街にある小さなアートスペースで主に週末に Live Art を、他にレクチャー、ワークショップなどのセッションも数多く展開してきた。2019 年にライブイベントを休業後、リニューアルした公式サイトでは Archive を中心に運営している。今回は2004年より自身の作品の振付、上演を開始、国内外で発表を行ってきた振付家でダンサーの神村恵との共同ディレクションにより都市をめぐる Live Art ツアーを企画。 「身ひとつで生きる」Live Art ツアー参加アーティスト：今井しほか＋大石一貴／神村 恵／佐々木文美／大東 忍／ミルク倉庫＋ココナッツ／山本浩貴（いぬのせなか座）	
水木 塁（みずき・るい） 1983年生まれ。京都市立芸術大学美術学部工芸科漆工専攻卒業、同大学美術研究科メディア・アート領域博士号取得。現代都市におけるリアリズムを基にした風景・情景・身体・モノの絡まり合いをテーマとした作品制作を行う。近年の展覧会に「若者のすべて」（半兵衛麩五条ビル 2F、京都、2023）、「見るは触れる 日本の新進作家 vol.19」（東京都写真美術館、2022）、「ON―ものと身体、接点から」（清須市はるひ美術館、愛知、2022）など。	
三田村光土里（みたむら・みどり） フィールドワークから得られる私小説的な追憶を題材に、写真や映像、言葉や日用品等の多様なメディアと組み合わせた空間作品を国内外で発表。文化庁新進芸術家海外派遣(2005)。 フィンランド三都市巡回個展(2005) 、ウィーン分離派会館 Secession にて個展(2006)。あいちトリエンナーレ 2016、アッセンブリッジ・ナゴヤ 2020、恵比寿映像祭 2022、瀬戸内国際芸術祭 2022。	
矢内原充志（やないはら・みつし） ファッションデザイナー・アートディレクター。横浜市在住。桑沢デザイン研究所卒業後、1997年～2011 パフォーミングアート「ニブロール」のディレクター・衣装として活動。2002年～2009年「Nibroll about Street」名義で東京コレクションを発表。2011年～メンズブランド「Mitsushi Yanaihara」を始動。2012tokyo 新人デザイナーファッション大賞プロ部門選出。近年は様々な企業や自治体のブランディングを多数手がけている。有限会社スタジオニブロール CEO、桑沢デザイン研究所非常勤講師。	

柳 幸典（やなぎ・ゆきのり） 1959 年福岡県生まれ。イエール大学大学院美術学部彫刻科修了。1993 年、第 45 回ヴェネツィア・ビエンナーレアペルト部門賞受賞を皮切りに国内外で脚光をあびる。移動、越境、国家など様々な社会的問題を、ユーモアをもって作品化する。瀬戸内海での《犬島精練所美術館》(2008)を経て 2012 年より尾道市の離島百島を拠点に活動し《NPO 法人 ART BASE 百島》を主宰。BankART では 2016 年に大規模な個展「柳 幸典〜ワンダリング・ポジション」を開催した。	
吉田山+西山萌+木雨家具製作所（よしだやま＋にしやまもえ＋きうかぐせいさくしょ） 3 人組。熱海を拠点に様々な都市を移動しアートプロジェクトや展覧会制作をおこなうアートアンプリファイヤの吉田山。東京を拠点にアート・デザイン・言葉・都市などメディアを横断し、粘菌（編集者）として活動する西山萌。什器制作は横浜で育ち、祖父の道具を受け継ぎ家具制作を行う木雨家具製作所の雨宮牧穂。	
葭村太一（よしむら・たいち） 1986 年兵庫県生まれ。人間の意識、痕跡や記憶、それらを想起させるような作品を手掛ける。近年は街中に残された落書きを木彫の彫刻へと立体的に再構築するシリーズを展開している。主な展示として「 Frieze seoul 2023 -フォーカスアジア- 」coex (2023 年/ソウル)、個展「34°40’33”N 135°29’55”E」Marco gallery (2022 年/大阪)など。	
関内地区	
石内　都（いしうち・みやこ） 1947年群馬県桐生市生まれ。神奈川県横須賀市で育つ。1979 年に「Apartment」で女性写真家として初めて第4回木村伊兵衛写真賞を受賞。2005 年、母親の遺品を撮影した「Mother’s」で第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家に選出される。2007年より続けられている被爆者の遺品を撮影した「ひろしま」も高く評価され、国内各地の美術館のほか、海外でも作品を発表している。2013年紫綬褒章受章。2014年にはハッセルブラッド国際写真賞を受賞。その作品は、横浜美術館をはじめ、東京国立近代美術館、東京都写真美術館など国内主要美術館、ニューヨーク近代美術館、J・ポール・ゲティ美術館、テート・モダンなど世界各地の美術館に収蔵されている。	 ©Ishiuchi Miyako「絹の夢」 Courtesy of The Third Gallery Aya
志田塗装＋酒井一吉（しだとそう＋さかい・かずよし） 横浜を拠点とする塗装業者。経年劣化した外壁を新たに塗り替えるだけではなく、長年の汚れや雨染み、傷などの風合いは美しいという考えのもと独自の描画技術によってこれらを再現する特殊塗装を行う一方で、建物の外壁塗膜を剥がし、収集する活動にも取り組む。酒井一吉が代理人を務める。「そして、初めに戻る」大久保あり＋志田塗装（アズマテイプロジェクト/2022）、「志田塗装 虚実の皮膜」酒井一吉（アズマテイプロジェクト/2022）など。	
創造都市 20 周年記念「横浜クリエイティブ COOP」（そうぞうとしよこはまにじゅっしゅうねんきねん・よこはまくりえいてぃぶこーぷ） 20 年前に始まった創造都市事業に端を発し横浜に集積したクリエイター達の「いま」を一挙紹介。横浜に縁あるアーティスト/クリエイターのグッズや小作品が購入できる期間限定ショップを開設、イベントも多数開催します。 主催：クリエイティブネットワーク（BankART1929＋黄金町エリアマネジメントセンター＋象の鼻テラス）＋横浜トリエンナーレ組織委員会	
みなとみらい地区	
中谷ミチコ（なかたに・みちこ） 1981 年東京都生まれ。一般的なレリーフとは異なり凹凸が反転している立体作品を制作。粘土で成形した原型を石膏で型取り、粘土を取り除いた空の雌型に透明樹脂を流し込み充填することで、イメージの「不在性」と「実在性」の曖昧さを「彫刻」という具体的存在として問う。2014 年より祖父が住んでいた三重県の空家に転居。旧犬の首輪工場を改装した「私立大室美術館」で毎年敬老の日に作品を展示する「when I get old」プロジェクトを継続中。	 Photo: Hayato Wakabayashi

小林 椋（こばやし・むく） 1992年生まれ。ある事柄や歴史的な出来事に対して、物理的な装置やオブジェを介入させることで生まれる飛躍、不和や違和感を観察しながら、別様な姿を思弁するための作品を制作する。近年の個展に「スゥと数えるように湿っぽい佇まいは、スゥと巻かれる音として砕ける前に、スゥと囲いまで敷きつめているようで」(ギャラリー16/京都/2023)、「亀はニェフスのイゥユのように前足を石にのばすと」(トーキョーアーツアンドスペース本郷/東京/2022)、「BankART Under35 2022」(BankART KAIKO/横浜/2022)など。	
大田黒衣美（おおたぐろ・えみ） 2019年文化庁新進芸術家海外研修制度を受けベルリンを拠点に活動し、現在は愛知県在住。主な展覧会として「ねこのほそ道」豊田市美術館（愛知/2023）、「DOMANI・明日展 2021」国立新美術館（東京/2021）、「the reverie」KAYOKOYUKI（東京/2022）、「MESA」クンストラーハウス・ベタニアン（ベルリン/2020）などに参加。	
鷹野隆大（たかの・りゅうだい） 1963年生まれ。2006年 セクシュアリティをテーマにした写真集「IN MY ROOM」で第31回木村伊兵衛写真賞。2011年には日本特有の街並みを集めた写真集「カスババ」を、2016年には影をテー マにした写真集「光の欠落が地面に届くとき 距離が奪われ距離が生まれる」を発表。性や都市、光と影など身近なものを題 材にしながら、制度化された視覚の外側を模索している。2021年、国立国際美術館（大阪）にて個展「毎日写真 1999-2021」を開催。2022年、第72回 芸術選奨 文部科学大臣賞受賞（美術部門）、第38回写真の町東川賞 国内作家賞受賞	 ©Takano Ryudai Courtesy of Yumiko Chiba Associates
吳 芊頤（ウー・チェンイー） 1987年生まれ。国立台北芸術大学美術学部絵画科卒業後、国立台南芸術大学大学院造形芸術研究院修士取得。日常で起こる現象に焦点を当て、テープ素材を用いて、イメージを符号化、構築し、様々な建築空間に介入することで、意味合いを融合した作品制作を行う。近年の展覧会に「窓光」（跑攤芸術祭、1/2Room、彰化/台湾/2023）、「森の秘密」（台南ニューアートアワード/酔美空間/台南/2022）、「鶯歌芸術祭」（鶯歌陶芸館/新北市/台湾/2021）など。台北横浜交流事業今期滞在作家として作品を制作発表。	
川俣 正（かわまた・ただし） 1953年北海道生まれ、フランス在住。ヨーロッパはじめ国内外の屋内外での展示、プロジェクト多数。横浜ではヨコハマトリエンナーレ2005総合ディレクターをつとめ、展示では大規模個展「Expand BankART」（BankART Studio NYK/2012）、BankART Life VI 「都市への挿入」（旧第一銀行横浜支店内外部＋みなとみらい線馬車道駅構内/2020）など。2013年芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。	
ヨコハマポートサイド周辺地区	
淺井裕介（あさい・ゆうすけ） 1981年東京生まれ。土、小麦粉、テープ、道路用白線などを素材に、環境にしなやかに呼応するように国内外の様々な場所で奔放に絵を描くことで絵画表現の本質を探る作家。2019年横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。今回は「この場所でつくる」をキーワードにマスキングテープに耐水性マーカーで植物などを描く「マスキングプラント」シリーズを、横浜ベイクォーター内の3店舗を紡ぐように展開。	
牛島達治（うしじま・たつじ） 1958年東京生まれ。1994年ACCの奨学金により渡米。80年半ば頃より自身で「無用な機械」と呼ぶ動く作品を制作し始める。以降展示やコミッションワーク多数。現在、武蔵野美術大学彫刻学科非常勤講師。今回は回転する石「旋回石」のシリーズをレストランの各テーブルに配する。	

片岡純也＋ 岩竹理恵（かたおか・じゅんや＋いわたけ・りえ） 片岡純也は 1982 年栃木県生まれ。岩竹理恵は 1982 年南アフリカ、ヨハネスブルグ生まれ。2013 年のパリでの AIR を機に、共同でインスタレーションの制作を始める。日常的な素材を使い、シンプルな技術で作品化する。今回は食品包装材等を扱うオリマツから素材を調達して制作した作品を店舗内に展示する。	
キム・ガウン（きむ・がうん） 1987 年韓国生まれ。イタリアと日本を活動拠点とする。韓国芸術総合学校建築学部を卒業後、画家、絵本作家、ジュエリーデザイナーなど多分野で活躍。2019 年より黄金町 AIR 参加。「世界とのコミュニケーション」をテーマとした細密ペン画を制作。2017 年に絵本『君は僕のプレゼント！』を出版。主な展示歴として、2018 年「君は僕のプレゼント！」（渋谷ヒカリエ 8、東京）、2019 年「You are my Gift」（黄金町、横浜）、「Sei il mio Dono!」（Pinacoteca Provinciale di Salerno、イタリア）など。	
蔵 真墨（くら・ますみ） 写真家。1975 年富山県生まれ。第 10 回さがみはら写真新人奨励賞（2020）受賞の他、写真集、パブリック・コレクションなど多数。BankART から韓国釜山にレジデンス派遣された際に韓国海苔等でフォトグラムを制作。今回は日本の海苔や乾物で美しいフォトグラムを制作。	
島袋道浩（しまぶく・みちひろ） 1969 年、神戸市出身。現在は那覇市を拠点に世界各地で活動。1990 年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、その場所やそこに生きる人々の生活や文化、新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンス、映像、彫刻、インスタレーション作品などを制作。その作品は時に生き物と人間との関係にも及ぶ。 詩情とユーモアに溢れながらもメタフォリカルに人々を触発するような作風は世界的な評価を得ている。	 参考作品《人間性回復のチャンス》 "Our Magic Hour," Yokohama Triennale 2011
白井美穂（しらい・みほ） 美術作家。1962 年京都生まれ。1988年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。1993 年ACCで渡米後、2006 年までニューヨークに在住、帰国後は東京在住。その作品は国内外で幅広く発表されている。今回は会場となる横浜ディスプレイミュージアム側に素材提供を受けて新作インスタレーション「Flower Child ― Cosmicomics（フラワーチャイルド ― コスミコミックス）」を展開する。	 Flower Child-Cosmicomics ブランドローイング
高橋士郎（たかはし・しろう） 1960 年代末よりメディア芸術黎明期のパイオニアとして活動。1970 年の日本万国博覧会に 20 代で参加、その後もコンピューター制御による先駆的な作品を多数発表してきた。80 年代からは空気膜造形の発明や、キネティック彫刻の制作に取り組むようになり、発表の場を世界へと広げる。2021 年に急逝してからは、教鞭をとっていた多摩美術大学内に高橋士郎研究会が設けられ、その後の作品の展示や紹介に携わっている。最近の主な展覧会に「高橋士郎　自由の気膜」（多摩美術大学アートテーク・ギャラリー/2023）、「高橋士郎　古事記展　神話芸術テクノロジー」（川崎市岡本太郎美術館/2020）等。	
谷本真理（たにもと・まり） 1986 年兵庫県生まれ。2012 年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了。彫刻・陶・絵画など様々な技法・メディアを用い、「遊び」や「偶然性」を内包させる作品を制作。今回は陶器のレリーフ作品と立体作品を展示。	

蓮輪友子（はすわ・ともこ） 画家。1981年大阪府生まれ。私的な日常風景や旅先で撮影された短い映像から抽象的な光の様な絵画作品を制作。近年は台北やオランダ・ロッテルダムなど、国内外に活動の幅を広げている。今回は絵画作品とともにそのソースともなる映像の展示も試みる。	
光岡幸一（みつおか・こういち） 1990年愛知県生まれ。武蔵野美術大学建築学科で学んだ後、2016年に東京藝術大学大学院油画科を修了。建築的な思考をベースに「遊び」の要素を取り入れつつ、絵画や写真、映像、立体など様々な手法で作品を制作。テープを用いて風景に文字を書くシリーズを展開している。	
村田 真（むらた・まこと） 1954年生まれ。『ぴあ』編集部を経て、美術ジャーナリスト／BankARTスクール校長／画家。横浜にアトリエを構えて19年。今回展示するのは、名画の上半分（空や壁）だけを模写した「上の空」シリーズ。	
ヤング荘（やんぐそう） 津山勇、あんのようすけ、北風総貴により2001年に設立、2014年に松岡未来が入居。ビデオや小型木造家屋のインスタレーション作品の他、展覧会カタログのグラフィックデザインなど、多岐にわたる分野を横断しながらも一貫した世界観で作品を制作。2007年より十二支をテーマにした年賀状作品を作り続けている。	
アートテーブル（各地区に分散展示）	
アトリエ・ワン＋東京工業大学塚本研究室（あとりえ・わん＋とうきょうこうぎょうだいがくつかもとけんきゅうしつ） アトリエ・ワン｜1992年塚本由晴、貝島桃代により活動開始、2015年より玉井洋一がパートナーに加わる。建築、公共空間の設計、美術展・建築展への参加及びキュレーション、執筆、教育など。 東京工業大学環境社会理工学院建築学系塚本由晴研究室｜修士　遠山美幸、越智将人、須藤寛天、小田拓生、鈴木ひかり、小林日向子、徐 徳天、Abir Ezzedine	
磯崎道佳（いそざき・みちよし） 現在北海道ニセコ町在住。「食糧危機は必ず来る」と想い、格差、紛争、気候変動が進んだ先にあるアート＋生活の新しい形を模索している。主な活動、MoMA PS1インターナショナル・スタジオ・プログラムに参加（2001）、自生の果物を使った自家製天然酵母パン・プロジェクト（2020～）、知らない者同士の手紙の交換を目的とした「パラシュートとマキオ」（2002～）、「ぞうきんぞうプロジェクト」（2004～）、「ドーム/DOMEプロジェクト」（2005～）、「笑う机」（2012～）など。	
甲斐貴大/studio archē（かい・たかひろ/すたじお・あるけー） 1993年宮崎県生まれ。2017年東京藝術大学卒業。木材を主材とした作品を制作しながら、在学中の2016年、設計から制作、施工までを一貫して管理するアトリエとしてstudio arche設立。東京都南品川に工房を構え、カトラリーから家具、インスタレーション、建築に至るまで、領域とスケールを横断した制作を行う。主な作品に「as it is」「mistletoe」「unclouded grobes」など。	
下寺孝典（TAIYA）（しもでら・たかのり（たいや）） 「屋台」を専門に「TAIYA（タイヤ）」という屋号のもと、屋台のリサーチから設計、デザイン、制作を行っている。また、アジア各国の「屋台の生態系」を調査し、都市空間で自作の屋台を引きながら研究と実践も行っている。人が集まることで生まれる巷（ちまた）の復権を目論んでいる。	

SPACESPACE（すぺーす・すぺーす） 大阪の中津商店街で活動を展開する建築設計事務所。2006年に香川貴範が設立。2010年岸上純子参加。近年は、生活や街の活動を形作る部材によるリノベーションの新しい方法論を提唱。主な作品に、ロングトールハウス、グリーンヒル、地面と屋根上の家、磯山調剤薬局、新・港村 ブックショップ、Dアパートメント、庭の形、上島町の介護付有料老人ホーム、君岡鉄工宇都宮工場、キノコハウス、SPACESPACE HOUSE、ふたつの斜面、上島町のシェアハウスなど。	
野老朝雄（ところ・あさお） 1969年、東京生まれ。幼少時より建築を学び、江頭慎に師事。2001年9月11日より「つなげること」をテーマに紋様の制作を始め、美術・建築・デザインなど、分野の境界を跨ぐ活動を続ける。単純な幾何学原理に基づいた定規やコンパスで再現可能な紋と紋様の制作や、同様の原理を応用した立体物の設計／制作も行なっている。主な作品に東京2020オリンピック・パラリンピックエンブレム、大名古屋ビルヂング下層部ガラスパターン、TOKOLO PATTERN MAGNETなど。	
西原　尚（にしはら・なお） アーティスト・実践者として、サウンドアートやパフォーマンスなど「音」にまつわる表現活動を行う。音を作り出すために身体と物と空間が必要で、それらとどのように付き合うのか、そして発展させられるのか、関心を寄せている。知らない人と会い、知らない文化や習慣に触れるために、国内外で展示やパフォーマンスを展開している。最近は2023年9月アルメニアにて「CYFEST」に参加。	
みかんぐみ 加茂紀和子、曽我部昌史、竹内昌義、マニュエル・タルディッツによる一級建築設計事務所。1995年NHK長野放送会館の設計を機に共同設立。戸建住宅から、 保育園、学校、商業施設や万博パビリオンなどの建築設計を中心に、家具、プロダクトやアートプロジェクトまで幅広くデザインを手がけている。主な作品：NHK長野放送会館、SHIBUYA-AX、200年愛・地球博トヨタグループ館、伊那市立伊那東小学校、横浜開国・開港博Y150はじまりの森、mAAch ecute 神田万世橋、横浜市立みなとみらい本町小学校、等	
ワークステーション＋武蔵野美術大学建築学科高橋スタジオ（わーくすてーしょん＋むさしのびじゅつだいがくけんちくがっかたかはしすたじお） 高橋晶子＋高橋寛／ワークステーション：高知県立坂本龍馬記念館」「仲町台地区センター」「野毛山動物園ふれあいコーナー」「京浜急行高架下新スタジオ」などパブリックな建築を多く手がけている。 武蔵野美術大学建築学科高橋スタジオ：黄金町バザール（2010）、象の鼻パーク10周年記念展 （2019）、都市デザイン横浜展（2021）などに出展・参加している。 技術アドバイザー兼制作チーフ：木村幸伸（同学科助手）	